

人生への一考察

野坂 清健

絶對的存在への實感

私は學校から歸ると直ちに箒を取つて庭へ出ます。そして、今日此の頃の炎熱に灼けついた庭面を、さらさらと掃き淨めて行きます。大地はおとなしく、又嬉しげに其の全身の淨められて行くのを待つてゐるかの如くに見えます。殊に夕暮、陽が鷹取山の陰に沒しますと、しめ／＼と匂ひ來る風の中に、大地は潔められた面を輝かしてきます。大地は喜んでゐるのです。そして此の潔められた大地の喜びは又私自身の喜びでもあるのです。

斯る勞働は、私にとつては絶對に他から強ひられたものでもなく、又因縁づくで仕方なしにやつてゐる仕事でもなく、夫れは眞に、私にとつては、得難い人生への反省の嚴肅な、しかも喜びに溢れた勤勞の一刻なのであります。私は箒を手に、額に汗を浮べながら、猶澤山の事實を其處に發見し、又考へる事が出来るのであります。例へば庭の一隅には柘榴の花が紅に燃え、梔子の花は甘い匂ひを滾し、箒の先に拂はれて行く草族からは、白

い蛾が舞ひ立ち、又其處には人目も引かぬ小さな黄色い或は紫の雜草の花が咲き盛り、又目を轉すれば、日向の岩の隙間には素早い蜥蜴の尾のかくれるのを見、時としては南天の木蔭に戀猫の惱ましげな眉態を垣間見る事も出來ます。

斯くの如く、現實の世界に於ける現象的な現れは多種多様であり、其處に又各々が現象的値打ちの差を生ぜしめてゐるのを見るのでありますが、併し私共は其處に「存在する物は、絶對的に實在とするものとして、凡て無限の存在性を主張してゐるものだ」と考へる事が出來ないでせうか。

例へば柘榴の花は柘榴だけの持つ美しさを、雜草の花は雜草の花だけの持つ美を、絶對的に其處に存在せしめて居る故に、此の深くして且つ嚴肅な存在を前にしては私共は、何づれの花が何づれの花に勝ると云ふ事が輕々しく言ひ得なくなつて來ます。

即ち此の眼前の柘榴の一花は、其の花瓣を落せば、永久に再び開く事のない一花であり、其の花弁の上に輝く露の一滴すらも、若しも微かな風に顫へて地上に落ちたならば、花上には永遠に其の眞玉なす白露の姿は失はれたのであり、又此の柘榴の一花の形と色を等しくする物

は世界の何處にも存在せず、其の花上の白露と姿を同じうするものは、過去、現在、未來を通して絶對に存在しなかつたのであります。一刻より一刻へ、昨日より今日へと變化推移しつゝある世界は、決して浮雲の如き世界ではなく、唯絶對の存在であり、我々の勝手に選ぶ事も出来なければ、又否定する事も出来ない世界であります。よしんば我々の意志が如何に自由であり、且つ大膽な行動をとるとしても、此の現實の嚴肅な世界を否定する事も又他の世界を選ぶ事も絶對に許されない道であるのであります。

現實生活の此の嚴肅感は、併しながら私共の考の上に成立つた理論ではなく、唯私共の眞面目な生活だけが體驗し得る一つの体感であると云ひ得ませう。推論ではなく、一旦我々が此の嚴肅感を獲得したとすれば、もはや私共は此の世界の中に微塵の如き存在をも輕々しく取扱ふことが出来なくなつて來ます。一花の開凋にも一言の干渉をなす事も出来ず、一露の散軼に對しても一指をも加ふべきではないと感じられて來ます。私共は唯、今日今此の時を惜みつゝ刹那々の實感を不可思議に體驗しなければならぬと思はれます。併して斯く私共の外界の存在を絶對に嚴肅なものとして、例へば夫れ夫れの花

の持つ美を絶對的實感として汲み取ると同様に、又私共自身の生活に對しても、其の如何なる部分、いかなる瞬間をも、輕々しく處理する事が出来なくなつて來ます。そして此の實感を切實なる體驗として持つ者こそ、世界を、人生を最も豊かに享受してゐる人であり、又精神生活の最高所である宗教的生活の深みにも導かれ、高められて行くものと思ふのであります。

猶、私共が自然への凝視を續けるならば、夫れ夫れの花は絶對的な存在を私共に示してゐるが、又夫れ夫れに其の花だけの表現し得る美しさを守り、決して他の花の美しさを侵害しようとはしない事を見るであります。此の意味に於て花を眺める時、凡ての花は虔しく自らを守り、又互に他を敬ひ合つてゐると見る事も出来ませう。例へば、此の炎天の下に泌み入るばかりの紅を以て咲き靜まる柘榴の一花に、嚴肅な絶對的存在を觀すれば、私共は其の花の紅に存在の尊嚴を感じて、思はず合掌せずには居られなくなつて來ます。「一人の僧を禮拜する事が、佛を禮拜する事である」所以の理を私共は其處に見出さないでせうか。私共は道の邊りに咲く雜草の花に合掌したとしても、事實は凡てを包容して餘す所のない絶對的實在を實感し、是を敬禮してゐる事になるであります。

せう。其處に私共は宗教的意識と感情の深められるのを感じないでありませうか。併して現實の世界を見れば、柘榴の花は雜草の花を敬禮し、雜草の花は又柘榴の花を敬禮し、凡てはお互ひに侵害する事なく、お互に敬禮し合つて眞に虔しい世界であるのです。夫れの如くに私共人間の社會に於ても、お互に絶對的な存在を認め合つて虔しい尊敬を交換する世界でなければならぬと思ふのです。

存在するものが、お互に他の絶對性を容認し合つた時自ら自己の存在を絶對的に尊貴なるものと實感すると同時に他に對して自己の存在に無限の謙虛を感じ得る事でありませう。私共の日常生活に於て、時折不快な經驗を味はなければならぬのは、此の存在の絶對的な嚴肅さに對する省察を缺き、其處より浸み出る謙虛の美德を失ふ事に原因を見出し得ませう。

謙虛とは私共の生活の現象的に現れる諸相の凡てを殺して、夫れの絶對的な實在性に沈潜する事でありませう。是を日常の經驗に徴して見れば、例へば愛憎の二つの對立に就いて、其の相對性を絶して人間としての絶對的な存在の實在性に思ひを潜める事でありませう。云ひ更へれば、人間としての其の本性に洞察の目を向ける事であり

ます。斯くの如く相對的な諸相に對して、虚しければ虚しいだけ絶對的に實在する世界は豊かに充實して來るのであります。例へば美の問題に就いて考へて見ても、事物の意味から離れて絶對的な實在性に心涵す時、始めて美の眞實性を豊かに享受する事が出来るのであります。亦是れを人生の最も根本的な問題である愛に就いて考へて見るに、親子の愛、夫婦の愛、兄弟の愛、或は戀愛の如き其の現れの時として煩はしく、時として樂しく時として美しく、又惱みに充ちて居るのは、夫れが餘りにも相對的な愛であるからと言へませう。其の相對的關係を離れるに従つて、我々の心には、廣く人類の凡て世界の一切に充ち溢れる普遍的絶對的な愛の境地に到達する事と思はれます。「如來已離、三界火宅」とは斯かる境界を指すものではないかと思はれます。又「今此三界、皆是我有、其中衆生悉是吾子」の大慈悲心は斯かる境地からも窺ひ知る事が出来るかと思はれます。そして不思議な事には、絶對的に實在する世界が無限に充實した内容を持つて生かされた時には、一度滅つされた筈の生活の諸相が、又ありの儘の姿を以て全的に生かされてゐるのを知る事でありませう。例へば親子の愛に就いて見れば、其の相對的な愛を絶して、普遍的、絶對的な愛に高められた

時、即ち我執の垢穢を洗ひ落して本質的に深められた愛となつて輝きわたるのであります。即ち一切に遍滿する純粹絶對の愛の深みに包攝されて親子の愛は生々と豊かに充實されてくるのであります。そこには偏夾に歪められた愛の衝突は無く、又利害得失に依つて濁らされた愛の相尅は起り得よう筈が無いのであります。

是等の事を佛敎的に云ふならば、假有の世界を空しくする事に依つて、中道實相の理は、諸々の幽冥を破して輝きわたるとでも云ひませうか……。

謙虚とは絶對的の實在に對しての謙虚であり、謙虚なるが故に、私共は世界と人生を有りの儘の絶對性を以て享受する事が出来るのであります。

現實的世界は現實的に存在する唯一絶對の世界であります、それは如何なる現實的のものをも其の中に抱擁しそれに所屬せしめると考へられます。過去に於て現實的であつた世界が現在の現實的世界と何等かの關係を以て連續する如くに、未將に於ても矢張り此の現實的世界と聯關して、それと連續した一体をなすであらうと考へられます。現實的世界は唯一絶對の連續であると考へられませう、私共は斯くの如く歴史的に嚴肅に推移してゐる現實的世界の外に此の世界とは全く別な、何等かの世界

が存在すると考へる事が出来るでせうか。娑婆において他に淨土を求むるのが我々の正しい態度と云へませうか

現實の世界は、我々に取つて唯一絶對の現實的な世界であり、我々はその世界の存在を絶對に嚴肅なものとして經驗するのでありますが、それと同時に私共は現實の世界を單に其の如く唯存在する世界として受取るだけではなく、必ず或價值判斷を以て受取つてゐるのであります。例へば石榴の花或は青葉に照り映へる日光や雲や或は月の光に結ぶ葉末の白玉は、唯單にその如くに存在するものとしてではなく、世にも不思議な美しさを持つたものとして受取つてゐるのであります。私共は現實的な世界の其の唯一の嚴肅な現實的存在性をだけ受取らずに必ずや其の世界の美しい輝きを受入れてゐるのであります。斯くの如く現實的世界の嚴肅な存在性を容認すると全く同一の嚴肅さを以て、此の美の客觀性を容認しなければならぬのであります。美しいものを假現のものとして否定せず、確實に美しいものとして肯定した時、其の美は斯の如き嚴肅な質感を以て確認せられるのであります、かゝる場合美は私共の判斷の結果であると云ふよりも現實的世界に屬して、其の世界と源泉を同じうして其處に實在すると見られませう。即ち主觀の認識の働

きが客觀の存在の立場を取ると見る事が出来ませう。併し是は敢て美の實感に限るものではなく、行爲の善を欲する意識も亦眞僞の知的判斷も亦同じ性質の實感として私共自身の生活の中に深刻に經驗されるところであります。

私共は知的判斷の眞僞、行爲の善惡又美醜に就いての確實な判斷意識を持つてゐるのであります。併して其の判斷意識は單に主觀的な、形式的な性質のものでなく、全く疑ふ事の出来ない實在性に根を置くものとして、私共の内に實感されるのであります。單に思索的形式的に考へるならば、どの様にも考へ得られるであらう世界様式の中で、私共の生命の實感に即して反省するならば、現に我々の住む此の現實の世界だけが現實的に存在する世界であり、否定する事も亦他を選ぶ事も出来ない嚴肅深刻なる實感を以て受け入れらるべき世界であります。價值判斷とは、此の現實的世界の姿の上に我々人間が意識の世界で下す判斷である當然現實的世界を基体とするのであります。その價值判斷も亦、其の本源的な意味に於ては決して選ばれたり否定せられたりする事の出来ない嚴然たる存在性を持つてゐるのであります。併して眞に現實的に存在するものは、現實の世界を措いて他に

ないとするならば、價值意識の實在性の源泉を必ず現實的世界の實在性に汲み取らなければならない事になります、此の事實は眞に體驗的に疑ふことの出来ない歸結であります。

我々の眼前にある世界は、空夢でもなければ幻想でもなく、それは確實な現實的存在であり、私共の生命はその一部分を占めるものとして、夫れに歸屬し、包容されてゐます、又我々が根本的に持つ生活の價值判斷は是又單に形式的主觀的な浮雲の如きものではなく、嚴然たる存在性を持ち、此の現實的の實在性と其の源泉を等しくするものであります。現實的世界は唯一絶對の連續した實在であり、價值意識は私共の生命の眞率な内面的な深い意識存在であります。此の二つのものを別々の存在後に結合するものと見ず、私共の實感に即して、元來唯一の現實的存在性を持つものと見た時、我々の前には或る新しい光に照らされた世界の展開されるのを知るのであります。

我々の生活を單に便宜的なものと考へる事を廢めなければならぬと思ひます、私共の價值判斷を單に主觀的形式的なものと考へてはならないのであります。凡ては嚴肅な存在の世界であり唯深刻に實感される世界であり

ます。私共の一舉一動はも早や相對的なものではなく、すべては絶對的であり、全体であります。私共の生活其の輝き、其の生活と輝きとの實在はすべて絶對的なものであります。斯く私共が自らの生活に於て、絶對的全体的な現實的存在の悲痛な實感を以て充實せしめられた時私共は此の深刻な體驗の世界を指して、宗教的世界と呼ぶことが出来るであります。

すべてを疑ひ、すべてを否定して、猶最後に如何にしても信じ肯定しなければならぬ、我々の現實的世界を如是に絶對に、信じ肯定する其の宗教的態度を根本的に容認しないものにとつては、生活は常に相對的であり眞摯の意義を持たないのであります。感激と情熱の涸渇した生活、喜びと虔しさを持たない生活、常に深く其の根を信じ、果敢に其の行ひを果す所のない生活——私共はもはや斯る空虚な相對だけの生活には堪へ得ないのであります。

現代の社會は、目まぐるしい變轉と動亂の中にあつてしかも其の歸する所の宗教生活を要求してゐるのであります、やがて平和の近づいた時、或は動亂の深刻の度の深まるにつれ第一に求められるのは、病める魂の安息の場所として又救済の光として、生きる事に即して宗教の

生活は切實に渴仰されるのであります。此の現代の人々の又將來起るべき社會の苦悶を救ふのは、現代の悩みを悩みとし、迷ひを迷ひとして闘ふ先驅者の手に依つてであります。釋尊の成道も、時代の悩みの先驅として、萬人の悩みを悩みとしての事であり、宗祖大聖人も亦病める國家と人類を救済せんが爲に時代に先驅して妙法の大旒を掲げたのであります。

我々は思ひを遠く其の始源に遡らしめなければならぬのであります、そして其處に我々の行くべき道を見極めなければならぬと思ひます、そして苦惱に充てる現代を救ふ先驅者としての自覺の中に、日々夜々を嚴肅な反省の中に送らなければならぬと思ひます。今や世界を擧げて動亂の嵐の中に投げ込まれてゐるのであります、斯る時嵐のさ中にあつて、我々の持すべき態度は世界の情勢と、我が國体を鋭く省察すると同時に、例へば颱風の中心の如く靜かであらねばならぬと思ふのであります。徒らに政治的に或は思想的にヒステリックになる事でもなければ、社會の奔流に無自覺に追従し又便乗する事でもないと思ふのであります。絶對の靜かさの中に我心を据え、其處から此の擾亂と逼迫の世相の奥底に潜むものを、我々の鋭敏な魂の觸覺を以て探究し、未來

に備へなければならぬと思ふのであります。

如何に健全なる宗教的精神と其の生活態度が戦争の聖なる目的完遂の爲の推進力となるかを考へるならば、又長い戦ひの後、社會人心の飢渴を癒すのは、何人の手に依つてなされるかと云ふ事に思ひを潜めるならば、私共の人生に果せられた任務と仕事の重大性は、自づと明らかにされると思はれます。

私の茶道観

中村 貫一

茶道に入つて問のない自分が、茶道を論ずると言ふ事は僭越であるかも知れない。しかし好きな道を論ずると云ふ事は、別に悪い事ではないと思つたから、面の皮を厚くして筆をとつた。わつしよくと御興を擔いでゐる若人を見て、お祭騒ぎをする日本人の、その野蠻さを笑ふ人も有るが、彼等にとつては、この御興擔が唯一の安全瓣なのである。吾々知識階級と誇つてゐる、偽善者どもには、彼等のこの純眞な境地が却つて羨ましく思はれないでもない。

世の中は、常にもがもな、渚漕ぐ、海士の小舟の網手可愛しも。

と、鎌倉右大臣源實朝は、北條氏の迫害に堪へかねて漁夫の穩氣な生活を羨んだではないか。

現代文化の、機械的生活に追ひ詰められて、窮理と喧噪と多憶とに疲れ果てた現代人の煩悶苦惱は、各人をして自暴自棄の社會主義に陥らしめるか、さもなくば發狂自殺より外に行き場のない様に思はしめる。これを悟つて何等かの安全地帯を求めようとすれば、まず藝術の世界に隠れるより外に途はあるまい。華やかで官能的な洋樂とか、感覺派の文學とか、未來派の繪畫とか種々様々な藝術も、一時の休憩所として慘酷な文明の嵐を避ける事は出来よう。併し、他を期待し、ひとりの道を外して行く者にとつて、それは決して永劫の安住地ではない。しからば現代の吾々は、如何なる安全地帯を求めたらよいのであらうか。

世人は茶の湯と言ふと、すぐ御隠居さんの慰みものかお嬢さんの嫁入り仕度の一つである位にしか考へてゐないのである。茶道とはそんなものではない。

茶道は道義的な、又禪學的な堅苦しい一面を具へてゐるが、他方面には、自然風物の愛より、茶器愛玩の藝術